

## あ と が き

リカ旅行の目的はコーネル大学（ニューヨーク州イサカ）とフィラデルフィアの American Philosophical Society を会場にして行なわれた第10回国際科学史会議に出席することであった。出席者の中では、アンカラ大学の A. Sayili 教授が The Observatory in Islam (1960) の著者として知られている。ついでながらインド天文学史についてふれると、出席者の中ではカルカッタ大学の Sen 教授がこの問題に多くの興味を持っているように見受けられた。出席者ではないが、Lucknow 大学の K.S. Shukla がインド天文学の古文献の校訂によい仕事をされ、1957年に Sūrya Siddhanta の梵文に注釈をつけた書物を出版された。アメリカの学者でこの方面の権威者は知らないが、ハーバート大学にいる若い D. Pingree はサンスクリットに堪能であり、現在インド天文学を研究しているということで、私も唐代に輸入されたインド天文学について少しく意見を交す機会があった。

(1962, IX. 3) (筆者は京大人文科学研究所教授)

---

## あ と が き

- 第9号を贈る。本号も予定ページ数をはるかにこえたが、新春への最大のプレゼントと自負する。岸本・吉川両氏には犀利な推考をもって7号所載の論文を完結していただいたが、さらに恵谷氏の穿鋭な追究、吉田氏の inventif な展開、藪内氏の鮮烈な展望に加えて巻頭には足利会長の意欲的な論文が剛重の響きをもって鳴る——学術誌としての本誌の声価はもはや決定的となった観がある。それにしてもページ数超過などのために加藤・岩本両氏には本号掲載の余地がなくなって恐縮の至りであるが、ことほどさように本誌は原稿が定時豊富に必着し、編集部を感激させている。この上は会員諸兄姉の心からのご支援、会員増加へのご協力を切にお願いしたい。『この文を見られる向きはそれを保護してほしい』——古代や中世ペルシアの帝王の刻文に見かける句意だが、『この文』は『本誌』とも訳されうる語だ。よってそのままこの巻尾に録して云々という次第。
- 次号は前号予告のとおり中原与茂九郎教授（本会副会長）の停年退官記念特集号。編集部の準備は着々すすんでいる。ご期待とご援助を乞う。
- 編集部現在の陣容では『会員消息』も委曲を尽くしがたい。会員諸兄姉のご動静——ご身分の変動、海外ご出張、西・南アジアに関連のある御著作等々、その都度ご消息願いたい。
- 本号も印刷は引きつづき、あぼろん社社主伊藤武夫氏を煩わした。記してその労を謝したい。

[編集部 記]